

日本語版への序文

2011年8月、1人の若者が警察に殺されたことが発火点となって、ロンドンの街並み全体が炎に浮かび上がることになった。暴動はロンドン市街北東部から郊外へ、さらにイギリス全域の都市に広がった。政治家や裕福な人々は、事件の広がりをテレビで見ながら、衝撃を受け、当惑し、激怒していた。

これらの暴動と、本書の第1章で描いた、人生が芸術を模倣するというハンブルグの事件とを結び付けるものは何だろうか。さらに、主流派のメディアからはほとんど無視されているものの、全ヨーロッパ25の都市と東京で、数百人、数千人の規模で行われたユーロ・メーデーとを結び付けるものは何だろうか。

大学を卒業しても就職できないために、路上の手押し車で格安処分品のたたき売りをしていたチュニジアの若者が、警察の取り締まりへの抗議の焼身自殺をしたことから始まって、2011年の中東全体の広場を埋め尽くしたデモを、それらと結び付けるものは何だろうか。ギリシャ全土に広まった「私は、支払わない！」運動とともに、アテネの憲法広場を埋め尽くしたデモと商店焼き討ちを、それらと結び付けたものは何だろうか。さらにアメリカのオキュパイ運動、スペインやポルトガルの「怒れる者たち（インディグナードス）」運動のなかで煮えたぎっていた怒り、同じ年にやや遅れてイスラエルのテルアビブで25万人が参加したテンティファード運動、チリのサンチアゴでの学生暴動と焼き討ち、2012年にスウェーデンのストックホルム周辺で4晩続いた暴動、2013年6月に当時のエルドアン首相から「ろくでなしの有象無象（チャブルジュ）」と呼ばれたトルコのイスタンブールで起こった抗議運動の波、そのすぐ後にブラジルで起こった大規模な抗議運動を結び付けたものは何だろうか。

最後に、それらを、「フリーター全般労働組合」や「素人の乱」に組織された毎年の自由と生存のメーデー、さらに、ある程度まで2015年の「シールズ（自由と民主主義のための学生緊急行動）」による安全保障関連法案反対デモにさえ結び付けたものは何だろうか。

もちろんそれぞれの事件の解説者たちは、それらにはすべて別々の理由があ

り、事件の性格も異なっていると言うだろう。それはそれで正しい。だが、それらはすべて、部分的には、プレカリアートの動きだった。しかも、原初の反抗の局面にある。つまり、自分たちが何を求めているのかはよくわからないが、自分たちが何に反対しているのかだけはわかるという時に、人々が引き起こす抗議や反応の動きだ。それはすぐに変わっていくだろう。いや、変わらねばならない。

どんな新しい社会運動でも、最初は、自分たちは同じだ、共通しているという感覚の現れから始まる。それは絶対に欠かせないもので、それがはっきりした形をとるまでには、時間がかかる。プレカリアートの場合、そんな感覚の現れははっきりなしだ。あちこちの広場、路上、カフェ、その他の公共空間で、解放されたエネルギーが、自分たちが一つの社会勢力になりつつあるという自己認識を創り出してきた。

2011年以来、ほとぼるのように表に飛び出してきたおかげで、プレカリアートのなかのより多くの人々は、朝になって鏡のなかの自分を見つめた時、もはや自分が落伍者とか責任逃れの怠け者とかではなく、多くの人々と共通する同じ苦境に置かれた者の1人だ、と感じるようになったと推測できる。このような承認の感覚は、今日の経済構造はプレカリアートを求めており、誰かが不安定な状態に置かれるとすれば、それは単純にその人自身に落ち度があったわけではないことを知ることで、孤立、力量不足、自己憐憫、あるいは自己嫌悪といった感情から抜け出し、集団としての強さを発揮するようになるために必要なものだ。

日本を含め世界中どこの国でも、プレカリアートの境遇にある人は、不安定で、不確実で、借金を負い、屈辱のなかで生活している。プレカリアートの人々は、シチズン（市民）から、ただ住んで暮らしているだけのデニズン（寄留民）になりつつある。数世代にわたって築き上げられてきた文化的、市民的、社会的、政治的、経済的な権利を失いつつあるのだ。プレカリアートはまた、自分たちが受けてきた教育よりも低い水準の労働や仕事に耐えることが求められている階級だが、そんなことは、歴史上初めてのことだ。ますます不平等になっていく社会のなかで、プレカリアートは厳しい相対的なはく奪状態に置かれている。

日本のプレカリアートの数は、どのくらいになるのだろうか。いまのところ、

標準的な労働統計は、工業化時代にふさわしいものとして設計され、洗練されてきたものなので、この目的には使えない。いずれも理想にはほど遠いようないくつかの指標を用いることによって、プレカリアートの大きさを推定できるだけだ。もっとも、現実には、プレカリアートの大きさは、部分的には主観の問題である。自分はそのなかだ、あるいはほとんどそうなりつつあるといった、数百万人によって感じられるような、集合的な意識の問題なのだ。それは、もう自分はりっぱな市民として生きていけないという感覚とあいまった、確固とした権利を失いつつあるという感覚なのだ。

あまりにも多くの解説が、不安定な雇用という最も明らかな特徴に集中しすぎています。それでもなお、その点から見た日本の状況は、急速な悪化を示している。1980年代末には、すべての雇用のなかで臨時雇いあるいはパートタイム仕事の占める割合は、ほぼ15%にすぎなかった。2015年までには、それはほぼ40%、ざっと2000万人になった。いわゆる常勤雇用がすべての雇用の50%を割り込むのはほんとうにすぐのことだと予測されている。

別の指標は、かつて大学を卒業した者は、そのまま常勤の専門的職業に就くものだったのに、今では新規卒業生の3人に1人が3年以内に転職するようになったことだ。このことは、多くの人々が、決定的に重要な最初の機会を逃していることを示す。もっとも、「次の機会」がいくらでもあるのならば、あるいは、経済がますます宝くじのようになりつつあるとして、国が職を失った人に対して基礎的な所得保障を提供するのであれば、そのように最初の就職機会を失うこと自体は、まったく問題ない。しかし、それは、まともに検討されてはいない。

問題は、ひとたびプレカリアートになってしまえば、そこから抜け出すのが実に難しいことだ。ある日本の若者は、ロンドンの『フィナンシャル・タイムズ』紙に語った。

「もし最初の就職に失敗すれば、ほんとうに大変です。私には職歴がありませんでした。履歴書に空白期間があれば、就職は、非常に不利になります。」

そして、プレカリアートの境遇には、貧困がつきものだ。日本の貧困は、ホームレス状態となって労働力から排除される状態と結び付いていた。しかし、今では年々貧困者の比率が上昇し、ついに16%を超え、所得の中央値の50%未満

の人はすべて貧困者ということになってしまった。したがって、労働力に入っているより多くの人が貧困者となっている。

一時雇用（非正規）労働者の所得は、同じ職種の常勤雇用（正規）労働者と比べて、50%以下、しばしば40%でさえある。首相による全般的な賃上げ要請にこたえて、各社は常勤のサラリーマン階級の賃金は上げたが、プレカリアートの賃金は上げなかった。2014年には200万人以上の人々が生活保護を申請した。それは、史上最高の申請者数であり、1990年代初頭の3倍である。そして政府は、生活保護支給額を引き下げたが、それはプレカリアートの境遇にある人々の不安感をいっそう高めた。そんなことをする必要は、まったくなかった。というのも儲かっている企業のためには、法人税が引き下げられたのだ。

そこに、労働市場の力学が働いた。2008年の金融危機以後に職を失った人々の多くは、保険のつかない臨時雇いかパートタイム契約だった。多くの人々が、会社からあてがわれたささやかな社宅を追い出された。しかも失業手当を受け取ることができなかった。そんな人々は目も当てられない状態になった。日本の自殺率が、1990年代から急上昇して世界平均を60%も上回ったのは、確かに偶然ではない。

一般的ではない指標だが、プレカリアートの諸側面を表現する新しいことばの広がりがある。それは、日本ならではのものだ。最初は、「フリーター」から始まった。そして「引きこもり」、「落ちこぼれ」と続く。さらに原発関連の下請け仕事を転々としながら暮らす臨時雇いを指す「原発ジブシー」や「ジャンパー」（あちこちの危険な仕事場にジャンプする人という意味だ）といった言葉がある。原発関連の言葉は、福島原発事故地周辺の除染労働に引きずり込まれた人々についても用いられるようになっていく。

原発事故関連の仕事は、これから30年間は日本を傷つけ続けるだろう。プレカリアートの境遇に落ちこむ境界線で生きながらえる数千人もの人々が、除染労働に引き込まれつつある。除染労働は、きわめて危険なうえ、ほとんど経済的な利益がない。ヤクザと呼ばれる暴力団関係者が、それまで仕切っていた建設業関連の労働者あつせんから除染労働の分野に移りつつあり、除染労働者に提供されるお金のほとんどを吸い取ってしまうからだ。

それは明らかに、日本でのプレカリアートの成長のなかで、最も醜い側面だ。

しかし、全体の構造を見れば、何か劇的なことが起こり始めていることも確かだ。それがどういう結果になるかは、まだまったくはっきりしない。私たちは、人間社会のなかで労働や仕事が行われるやり方が大きく転換する境界線にいるのだ。この転換によって、20世紀に立てられたさまざまな推定は、すべて木っ端みじんに吹き飛ぶだろう。常勤で、長期継続雇用を典型とする「職務 (job)」から、「課題 (task)」への転換がますます増えてきている。ますます多くの人々が、不特定多数の人を対象にインターネットで請負仕事を募集するクラウドソーシングの「プラットフォーム」を通じて、提示された課題をこなすようになってきている。それは全世界で見られる傾向だ。

日本では、このやり方で「副業」をする人が増えてきた、といったイメージしかない。しかし、世界のあちこちで、ますます多くの人々が、このやり方で主な所得を得るしかないという状況に追い込まれつつあり、日本も例外ではないだろう。政策担当者や研究者がこの傾向について触れることはほとんどない。しかし、この傾向が計り知れない影響を及ぼすことは間違いない。

地球規模で見れば、プレカリアートの成長に伴って、人々の間に痛みと社会的無規範 (アノミー) が広がるだろう。「怒りの日々」として爆発する暴動はますます増えるだろう。しかし、怒るだけでは十分ではない。プレカリアートの幾人かは、醜悪な大衆扇動型の政治家 (ポピュリスト) に耳を傾けているが、自分たちの人間性を再発見し、社会に目を向ける人々もいる。全世界で、プレカリアートの内部にはエネルギーがみなぎっている。プレカリアートは、前進する新しい方向を目指して、さまざまな運動を組織し、闘いつつある。

プレカリアートが、社会を転換する力をもつ新しい一大階級として登場しつつあるという主張を強めてくれる別の動きもある。工業化された世界で続く緊縮経済の追及もその一つだ。それによって、ますます多くの人々が、プレカリアートに押し込まれている。そして、本書で「地獄に至る政治」として描いた傾向が強まっている。さらに、すべてを商品化する大衆迎合的な政治 (ポピュリズム) の広まり、そしてアメリカ政府のために世界各国政府高官や大使館や個人など広範な人々を、インターネット関連大手企業の協力を得て盗聴していたことを内部告発したエドワード・スノーデンの勇敢な行為が示したような、監視国家の広まりもそうだ。

緊縮経済とともに、「量的緩和政策」の形をとる金融緩和政策を実質的に制度化することが、正統派とみなされるようになった。それは、日本銀行が数年間実施した後に、アメリカ、イギリス、そしてユーロ圏もまねるようになった政策だ。それは膨大な額のお金を金融業者や銀行や金権政治に注ぎこみ、そのお金を投資のために自由に使ってもらい、金持ちが人のお金を使ってさらに自分のお金を増やしていけるようにすることであり、根本的に逆進的な金持ち優遇政策だ。そのお金のほんの一部分だけでも、プレカリアートの境遇にある人々のために、市民のための基本所得（ベーシック・インカム）の形で提供されるならば、所得面での貧困、不安定、そして経済成長に対する効果は、相当なものになるだろう。

本書の続編である『プレカリアート憲章——デニズンからシチズンへ（*A Precariat Charter: From Denizens to Citizens*）』（2014年）という本は、この緊縮経済がプレカリアートに及ぼす影響と、緊縮経済政策を支えるやっかいな功利主義的思考を議論することで、現在の論争を前に進めようとする試みだ。その『憲章』は、プレカリアートの不安定さと願望を考慮した一連の政策を提起している。それは政権公約ではなく、あくまでもプレカリアートにとっての新しい課題を設定するための出発点として提起されている。

その本はまた、本書に対する批判にも答えている。その批判とは、プレカリアートは一つの階級ではなく、本書で主張したような変化は一切ないというものだ。このような批判は、独特な種類のマルクス主義と結び付いた人々からのものだが、この人たちにとっては、資本主義は不変なのだ。だが、グローバル資本主義は、各国ごとの産業資本主義とは根本的に異なっている。労使関係、仕事のパターン、社会保護や規制や再分配のシステムは、グローバル化の時代になって劇的に変わった。新しい階級構造が生まれてきつつあり、その階級構造は、資本家と「労働者」からなる単純なものとはほど遠い。

最も基本的なことは、グローバル化する階級構造が、所得分配の20世紀的システム崩壊の反映として、出現していることだ。ますます多くの所得が、資産所有者や、独占や寡占による超過利益を追及するレントシーキングを行う人々の手に入るようになっていく。近年の政策とは非常に異なった政策が採用されない限り、日本のような先進工業国の実質平均賃金はこのまま停滞を続け、

——そしてプレカリアートの人々の実質平均賃金はさらに低下し、——不平等はますます大きくなり続けるということをしかりと認識すべきだ。私たちは、これまでとはまったく異なる新しいシステムを組み立てる必要がある。

この新しい階級構造が理解できない限り、首尾一貫した戦略を開発することはできない。かつてのマルクス主義が唱えたブルジョワジーと労働者階級（プロレタリアート）との二元論は、19世紀に出現した資本主義的産業社会のために作られた考え方だ。それは、それら二つの集団内部の共通性を想定している。本書の主張は、現在進行中のグローバルな大転換のなかでは、階級分裂が起こりつつあり、昔ながらのイメージの階級のなかに、同じではない利害感心や願望をもつ人々を押し込んでみても、まったく意味がないということなのだ。

本書は昔ながらの労働者階級の分裂に関する本だ。したがってブルジョワの領域内部で起こっている差異化については、ほとんど注意をはらっていない。この点について検討すれば、まさに形成されつつある階級の構造的な特徴に注目することができるようになる。新しい階級という社会集団は、それまでの構造に覆いかぶさるようにして出現するということを念頭に置いて、プレカリアートを見ることができるようになる。

資本所有の領域での分裂はよりいっそう興味を引くものだ。ここでの目的のために、現在起こっていることの本質的な部分についてだけ指摘しよう。頂点には、金権政治支配層がいる。それは、「1%」ではなく、ほとんど「0.001%」だ。このことは、(トマ・ピケティの主張とは反対に)日本では、他の多くの国ほどには著しいものではないが、グローバルな金権政治支配はいかなる国境も飛び越えるので、日本でも確かに作用している。

世界の億万長者は、ほとんどが地代や利子、配当などだけで生活する金利生活者だ。金融資本、天然資源、先端技術開発から発生する富をコントロールし、しゃぶりつくす。ばかばかしくなるほどの額のお金を受け取る。そして、ぎょっとするようなやり方で政治権力を用いる。このような金権政治支配層の力をそぎ落とすための戦略を含まないような政治プログラムには、それが書かれた紙ほどの値打ちもない。

この金権政治支配層の下に、起業家、会社の取締役、会社のオーナーの資本家からなるエリート階級がいる。これらの人々の所得や富が急成長したこと

が、日本での不平等の拡大の根本要因だった。その下に、より大きな集団があり、いわゆる「中小企業（スモールビジネス）」経営者から、ささやかな店を構えるか、^{いちば}市場の一隅を確保して商いをする店主や零細業者たちがこれに入る。

この一番下の労働する資本所有者集団は、常に存在してきた。19世紀のイギリスでは、この集団は、危険な階級と呼ばれた。この人たちは資本主義的ブルジョワジーにも、プロレタリアートにも属さないからだ。この人たちは、労働者階級の価値観も、中産階級の価値観も受け入れなかったために、危険なものみなされたのだ。この人たちは、独立心が旺盛であり、本書で描いたような意味での「労働中心主義者」ではなかった。

今日では、危険な階級はプレカリアートだ。このことは、何人かの本書への批判者たちに浮かんだ疑問とかかわる。プレカリアートを階級という用語で考察することは役に立つのだろうか、という疑問だ。プレカリアートは、昔ながらの単一の労働者階級の一部分にすぎないものであり、不安定という意味での「プレカリアートの状態」とは今や誰にでも当てはまる一般的な状態にすぎない、と何人かがコメントしている。本書は、この点について、あまりにも学問的な論議に入り込んでしまうことを避けて答えている。プレカリアートは、一つのカテゴリーであり、プロレタリアートと同じではない。そう理解することは、確かに、分析を行い、政治的想像力を働かせる助けになる。

プレカリアートの境遇にある人々は、教育があり、自分たちがフルタイム雇用の肉体労働をする人だとは思っていない。そして、プレカリアートの人々の多くは、「労働者階級」と呼ばれることを快く思わない。それは科学的な証拠とは言えないが、これまで私の講演を聞いてくれた聴衆の多くは、そう語ってくれている。財産もなく、専門職として雇用されてもいないばかりか、しばしば危険な水準の債務を抱えているこのような人々は、「中産階級（ミドルクラス）」という呼び方にもふさわしくない。古い呼び方はもはや通用しない。一つの新しい階級が出現しつつあるのだ。

マルクス主義者たちが受け入れざるを得ない用語で言えば、プレカリアートとは、異なった生産関係、異なった分配関係、異なった国家との関係をもち、異なった階級意識を生み出しつつある存在として定義される。プレカリアートは、形成途上の階級だ。なぜなら、プレカリアートは、いまだに次の三つのグ

ループに分裂したままだからだ。第一に、ほとんど教育がなく、幾分かは現実のものも含まれるかもしれないが、想像されただけの過去を振り返って、右派のポピュリズム的な政治家を支持しがちな人々。第二に、移民か「よそ者」であって、現在の幸せと安心できる家庭だけを求めて、政治的には中立を保ちがちな人々。第三に、教育があるのに、未来を拒否された人々だ。進歩的な政治的対応を形作ることになるのは、この最後のグループだ。

「危険な」階級としては、プレカリアートは、自分たち自身を定義するような条件を廃絶するために、十分に対自的階級とならねばならない。そして、そのような過程の中で、階級として消えていかねばならない。別の言い方をすれば、プレカリアートはしっかりと団結して、政治的に強力になり、国家に圧力をかけて、プレカリアートが陥っている不安定な状態をなくすような社会的、経済的な条件を創り出すようにしなければならない。

このような一連の違いから、プレカリアートの活動家たちと、労働組合との間の関係が、どこでもぎくしゃくとしてぎごちないものになってきた理由が説明できる。そのような関係は、プレカリアートの強さと交渉力が労働組合に匹敵するかあるいはそれをしのぐようになるまで変わらないだろう。そうなるまでに変わらなければならないのは、労働組合のほうだ。労働組合は、たいていの場合、この現実に対応できなかった。その点で、プレカリアートが独立して声を上げる機会を設けようという最初の試みのなかから、日本でプレカリアートユニオンというプレカリアートの労働組合が現れたことは喜ぶべきことだ。

19世紀末から20世紀末まで1世紀以上の間、プロレタリアートは、時計を気にする大量生産の現場で職長の支持にしたがうフルタイムで安定した労働や雇用の安定のために、扶養家族のための稼ぎ手として、家族とともに闘ってきた。だがそれは、プレカリアートが闘って求めるものではない。今やプレカリアートが成長してきたので、労働の安定のために闘ってきたプロレタリアートは、その性格を変えるだろうと想像することは、歴史と常識に歯向かうことだ。労働組合は必要だが、変わらなければならないのは、労働組合のほうだ。言葉とともに、優先事項も変わらなければならない。

プレカリアートは、二つのやっかいな現実を評価するうえで、昔ながらのプロレタリアートよりも有利な地位にある。プロレタリアートが昔ながらの福祉

国家を守ろうとするのに対し、プレカリアートには、福祉国家の徹底的な見直しが必要だということがよくわかる。プロレタリアートが実質賃金を守り、賃上げ要求に集中しようとするのに対し、プレカリアートは、実質賃金の値上げ要求は、たとえ望ましい場合であっても、ますます大きくなる不平等を逆転させるための主な方法ではないことを理解するうえで、より良い立場にいる。グローバル化した市場システムのもとでは、OECD 諸国の実質賃金がかなりの程度上がるということは、これからの長い年月の間にはありそうもない。新しい所得分配のシステムが求められているのだ。

プレカリアートは、自分たちが危険な階級であることを、予期しなかったようなやり方で証明してきた。選挙で投票するのは、そこそこ面倒なものだが、そんな気持ちが思わぬ形で代議制民主主義の正統性を掘り崩してしまっている。2014年の年明けに行われたEUの選挙では、有権者の34%しか投票せず、史上最低を記録した。2014年12月の日本の総選挙の投票率も、史上最低だった。自民党が勝利したが、かろうじて有権者の4分の1の票を獲得しただけだった。高齢者に比べると、若者の投票が少なかった。それは、勝利した保守党が有権者の24%の支持しか獲得できなかった2015年5月のイギリス総選挙と驚くほど同じだった。このような政権成立の仕方は、実際に、民主主義ではない。

投票率の低さによって、ある種の利害関係者が有利になり、ポピュリズム的な極右政治家のような、とうてい人々を代表しないような特異な集団が多数派になってしまう傾向がある。また、政治が専門家だけのものになってしまいがちだ。プレカリアートによる大量の棄権の理由は、主な政党が、極楽に至る政治、つまり良い社会の未来図を提供していないという単純な理由による。

労働組合が官僚的な組織となっているために、手を組んで共同行動を続けることが難しく、プレカリアートが労働組合と協力するのは困難だった。騒々しい抗議行動は、これまではほんとうに必要なものではあった。しかしそれだけでは社会を変えることはできないことを認識するという局面に、今こそ一歩前進しなければならない。

多くの国で、旧来の確立された主要政党をプレカリアートが政治的に無視し、軽蔑し、あざ笑うだけでは、プレカリアートが直面するますます厳しくな

る不安定さの問題を解決できないことが、だんだんと認識されるようになっていく。新しい運動や政党を通じて、十分に理解できるような、しかもある意味でみごとに形で、政党政治が文字通りに拒否される場合、政治に対して再びまっとうにかかわっていく道が開かれる。スペインのポデモス (Podemos) やその他のグループ、ギリシャのシリザ (Syriza)、イタリアのシニストラ・エコロジア・リベルタ (SEL)、デンマークのアルタナティヴェ (Alternativet)、ポーランドのラゼム (Razem) といった、プレカリアートの課題に沿って結成された実に興味深い政党がそれだ。これらの政党がすべて、いっそう侮れない、進歩的なものに進化していくことは大いにあり得る。しかし今のところは、それらは、より良い時代への前触れにすぎない。

進歩的な考えの憲章に基づいて組み立てられた、組織的な政治活動だけが、古い型を破る。ただ反対するだけではだめだ。提案することだ。未来像をつくること。そして人々を呼び集めよう。しかし、昔ながらのプロレタリアートと、出現しつつあるプレカリアートとが団結できるような共通の課題があるなどという考えにだまされてはいけない。プロレタリアートは失われた過去を夢見ているが、プレカリアートは、可能性に満ちた未来を夢見ている。今日のプレカリアートは、実にさまざまな形で環境を破壊することになる、終わりのない労働と消費が続く逆ユートピアではなく、より良い未来を生き返らせようと思う、そんな私たちのことだ。私たちはみんな、そのためになすべきことがある。

2015年11月

ガイ・スタンディング